

第 54 次研究のまとめ

研究部

第 54 次研究は、全校研究テーマ「学び合いが生まれる学校づくり」の 3 年次である。わたしたちは、今までの研究の成果から、個の学びが成立するということを、「生徒同士の関係性の変容」「わからなさに着眼する」「新しい自分に出会っていく」という視点で見えていくことが大切であると考え研究をすすめてきた。そこで、研究の重点を『わからなさ』と向き合わざるを得ない場面を思い描き、それを乗り越えようとする生徒への支援を具体化する」とした。第 54 次研究では、「個の学びが成立する過程」にある「学び合い」の姿を明らかにし、他者の考えに耳を傾け、受け入れていく経験の積み重ねによって、他者とともによりよく生きていこうとする「地球市民」への育ちへとつながると考えた。以下に第 54 次研究の成果と課題を示しておきたい。

成果は、次の 3 点である。

(1) 見方や考え方を伝え合う関係性にある生徒に、見方や考え方を揺さぶる（視点をずらす）支援をすることで、生徒の中に「わからなさ」が表出していく。教師は、見方や考え方を揺さぶる支援の具体を、単元や本時案に位置づけ、授業を構想していくとよい。

→ I-1-(1) 村松教諭の数学の実践より

(2) 「わからなさ」と向き合った生徒は、それを乗り越えようとするときに、異質な友の考えを受け止めながらも、容易には異質な見方や考え方をわかろうとはしない。教師は、学びの道筋にある「わからなさ」を思い描きながら授業づくりをすることで、伝えられる見方や考え方を明らかにし、他者ととも「学び合う」生徒の姿を具体化していくとよい。

→ I-1-(4) 松澤教諭の道徳の実践より

(3) 生徒が「わからなさ」を乗り越え、新しい見方や考え方のできる自分に出会っていく過程に、自分の学びを支えてくれる「他者¹」としての友の存在があり、対象を何度も見つめ直そうとしていく。教師は、生徒が学んでいく対象を明らかにし、個の学びの道筋を構想していくとよい。

→ I-1-(2) 佐々木教諭の英語の実践より

→ I-1-(3) 河西教諭の保体の実践より

課題は、次の 2 点である。

(1) 「わからなさ」を、個の疑問である知識・理解（わかる \leftrightarrow わからない）や方法（できる \leftrightarrow できない）としてとらえられてしまうことがある。よって個の学びの中で表出する「わからなさ」を十分に思い描けなかった。わたしたち教師がとらえている「わからなさ」について語り合う機会をもてなかったことが原因であると考え、個の学びを思い描くことの難しさに教師自身が向き合い、授業を構想していくことが大切である。

(2) 教師が生徒の中に立ち現れてくる姿を十分に構想できなかつたり、読み解けなかつたりしたことで、生徒の大切な考えに気づけなかつたり、それを受け流してしまつたりした。わたしたちは生徒の具体的な姿を日々の実践を通して語り合うことで、教科の垣根を越えて生徒観、教科観、教材観を磨き上げていかれる集団でありたい。

他者¹：一緒に学び合っているみんな=<他者>ということではなくて、やはり自分が対象とのかかわり方を何かしら変えていかざるを得ないときに立ち現れてくる<他者>（吉永先生の講演会記録より）